

# 市民の皆様へ

第151回

市長 谷一夫

## 頑張っています ファッションデザインセンター(その5)

一宮地場産業ファッションデザインセンター(FDC)が「よりビジネスに近い事業へ」と方針転換してから、早いもので6年がたちました。

いい素材と(ジャパン・ヤーン・フェア)、いい情報から(ネリーロディ社と提携)、産地の技術を生かし(匠ネットワーク)、地元企業に良いものを作ってもらい、売れるところで売る(東京展・パリ展)。新しいアイデアを募り(ジャパン・テキスタイル・コンテスト)、優秀な人材を育て(尾州インパナ塾)、中国に技術的に追いつかれてもブランド力で売る(ジョイント・尾州ブランド)。FDCはこの戦略に従い、業界の皆さんの知恵と力をお借りしながら国内外に尾州産地の存在をアピールし続けています。

昨年10月、国内最大手の既製服メーカーと地元の染色整理企業が資本を出し合った会社が市内に設立され、企画開発センターが始動しました。見学にお邪魔した折、本市に拠点を構えた理由をお尋ねしたところ、「一

宮市は地理的に日本の中心に近く、高速道路網の結節点として利便性に富んでいる。最近、中国沿岸部では人件費などが高騰し、低コストで衣料品が作れなくなつた。これまでのように低価格で提供することにとらわれることなく、消費者が求める上質の衣料をいち早く提供する体制づくりを目指したい。どんな素材にも対応できる尾州産地の技術力と、小回りのきく生産体制が非常に魅力的だ」と話しておられました。

「大手メーカーが尾州産地に拠点を持つことは、日本の繊維産業にとって大革命だ(産地織物メーカー社長)」というコメントは少々オーバーな表現かもしれませんが、原油やウールなどの原料高騰によるコストアップ、国内での衣料品の売れ行き不振というダブルパンチに泣く産地にとつて一筋の光明に違いありません。FDCが情報発信を続けてきた成果の表れと言ってもいいと思います。

昨年9月には愛知万博の一市町村一國フレンドシップ継承事業の一環

として、イタリアのベネツィア近郊にあるトレヴィーゾ大学へ尾州産の布地を提供しました。未来の有名デザイナーを目指す学生たちにより、その布地を使った学内コンテストが行われ、最優秀作品を制作した2人の学生と先生を招待しました。彼らは市内の生産現場や京都の和服文化も勉強し見聞を深め、好印象を抱いて帰国しました。トレヴィーゾは中世のたたずまいが残る小さな町ですが、サッカーシューズのディアドラやベネトンなどのブランド企業が本拠を構えています。これからも交流を深めていきたいと考えています。

FDCは尾州産地にしっかりと腰を据えながら、目は常に海外や東京に向いています。本市で続けたいイベントがあります。ジャパン・ヤーン・フェアという日本で唯一の糸の総合展示会で、今年2月の開催で5回目となりました。毎回3000人近くも全国から訪れ、最近では中国・台湾・韓国などからも来場され国際的になりました。

ヤーン・フェアの人気の秘密。それは繊維やファッションに関わる多くの人が感じている、「価格競争ではなく、良いもの(＝感性の高い服をつくって提供したい)」という気持ちで、遠方から本市へ足を運ばせるのだと思います。

糸からの差別化を起点に、産地の技術力や企画力に裏付けられた質の高いオリジナルな織物を提案し、最新のファッションを追いかけるレベル企業などと密接に協働することにより、消費者の皆様が満足していただける服が提供できる織物産地として再び脚光が浴びられるよう、FDCの振興施策を今後も強力にバックアップしてまいります。



ジャパン・ヤーン・フェア